



きじむんの どう〜ちゃいばにい〜 文庫紹介編

いはふゆう 第5回：伊波普猷文庫

キーワード：沖縄学の父 おもろさうし 田島利三郎 真境名安興 伊波普猷賞

はいさーい！ きじむんヤイビーン。カンシ アチク ナトーイビーシガ、フミチマキン シミシエービラニ(こんなに暑くなっていますが、夏負けしていらっしゃいませんか)。

今回は、沖縄学の父と言われる伊波普猷の文庫について紹介するよ。

伊波普猷(1876.3.15-1947.7.9)

言語・文学・歴史・民俗などを総合した沖縄研究の創始者で、沖縄学の父。



伊波普猷は、那覇西村の士族の家に生まれました。物外(ぶつがい)と号しています。実弟は伊波月城。また、恩師は田島利三郎(おもろ研究の先駆者)、友人に真境名安興・東恩納寛惇(共に沖縄学の研究者)がいます。1973年、伊波の学問的業績をたたえ、沖縄研究を振興する目的で伊波普猷賞(沖縄タイムス社主催)が設けられています。

伊波普猷は、「おもろさうし」をはじめ多くの研究成果を残し、これらは沖縄学の基礎となっています。それらは『伊波普猷全集』でじっくりと味わってみてください。

伊波はフェミニストで、女子教育の必要性を強く訴えていました。私生活では女性によくもてました。また沖縄の言語・風俗・習慣が日本風になるべきだと主張していました。

伊波が大事にしていたコレクションは、御遺族の理解と仲宗根政善先生のご尽力により、1955年11月17日 Rockefeller Foundation の援助で当館へ納められました。寄贈の経緯は、仲宗根政善『石に刻む』(沖縄タイムス社 1983年)をご覧ください。冬子夫人は「琉球大学に伊波文庫として永久に保管してもらいたい」と述べています。

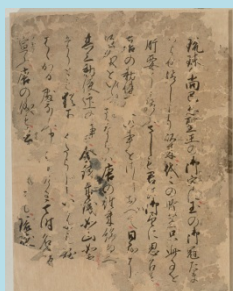
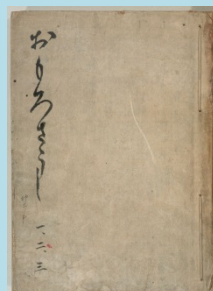
伊波文庫の特徴

伊波文庫は、106点161冊。内訳は、資料88点、刊本18点。寄贈当時の簡易目録は、「伊波普猷文庫目録—琉球大学附属図書館蔵」(『沖縄文化』第38号 昭和47年)をご覧ください。伊波の旧蔵資料であること、恩師田島利三郎や真境名安興から譲り受けた資料があること、古琉歌集、語学・琉球文学の古文書からなることが特徴です。

伊波文庫にしかない貴重な古文書はいくつもあります。特に有名なのは、新約聖書を琉球方言で書いた『琉球語新約全書』、1609年の薩摩による琉球侵入を喜安が書いた『喜安日記』、琉球の最高神女である聞得大君の記録『聞得大君加那志様御新下日記』などがあります。三線の楽譜である『屋嘉比朝奇工工四』は、沖縄県指定有形文化財に指定されています。また、恩師田島利三郎から譲り受けた琉球の語学関係のノートや古文書の写本などが、このコレクションの特徴となっています。

伊波文庫の公開

伊波文庫は現在、主要な古文書を当館ホームページの「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」で全頁を高画質で公開しています。また、各古文書の解説や翻刻、訳文や英訳も出ます。沖縄学の基礎を築いた伊波のコレクションをぜひご覧ください。



(AS担当)